

トピックス

中小企業IT経営力大賞2013

みんなBiz連携団体活動報告

ほか

特集 1

地域に根づくコミュニティづくり

特集 2

ITベンダーのITC社内活用

～社内ITC活用事例!～

ITベンダーのITC社内活用 ～社内ITC活用事例！～

1. 「ベンダーとITコーディネータが協力して中小企業を盛り上げたい」

—株式会社コンピューターシステムハウス（福島県郡山市）—

成功の秘訣は 「料金」「距離感」「熱心さ」

福島県郡山市にある株式会社コンピューターシステムハウスの代表取締役社長・藪内利明氏は、強烈な個性と情熱をもって、地元のIT業界を活性化しようとしている人物だ。

コンピューターシステムハウスはわずか15名の社員ながら、売上2億円、税引き前利益3200万円を誇る優良企業だ(金額は2011年度)。基幹系をメインにしたコンサルタント業務を主流にし、部分的なプログラム作成や下請けはほとんどしない。それを32年間続けており、借金をしたこともなければ、補助金を受けたこともないという。

成功の秘訣は「料金」「距離感」「熱心さ」。まず、何といても料金が安い。業種別に自社開発したシステムをベースに、オリジナリティを加えたいわゆるセミオーダーメイドにすることで開発コストを抑え、1/2～2/3の価格を実現した。さらに、ほとんど修正料は取らないという。



代表取締役社長 藪内利明氏

その代わり、そのぶんは次につなげようとしている。だから90%以上のリプレース率を誇る。経営計画書や財務内容も公開し、ユーザーに近いところにいることもアピールしている。

そして、システム開発に1つでも失敗すると社員は辞職伺いを出す。それほど命をかけて仕事に取り組んでいる。そのまじめさ、熱心さがあるからこそ、ユーザーに信頼してもらえらるという。

SEやPMの足りない能力を ITコーディネータに求めている

藪内氏は、ITコーディネータのことはWebサイトを見て知ったという。福島にもITコーディネータの協会があることも分かった。さらに調べていくと、ITコーディネータは良心的で健全な人物像というイメージを持ち、「ITCふくしま」にも法人賛助会員として入会することにした。

そして、ITコーディネータを社内でも育成しようと考えた。

「基幹系システム構築時の最優先業務は、その会社の分析と目標作り。



ITコーディネータ 我妻くるみ氏

SEやPMでもできるが、学問的な裏付けがない手法なのでやはり限界がある。そこでITコーディネータのツールが必要だと思い、ベテランのSEに取得させました。最初は私が取ろうと思いましたが、SE出身の40代の女性に取得させることにより、その後続く人が出やすいと考えました。SEというのは、ITコーディネータの資格を取得すれば、40代でもまだ伸びていくということを他の社員にも見せたかったのです」(藪内氏)。

ただ、総務や経理のスタッフでITコーディネータの資格を取っても意味がないという。システム開発の実践部隊が取ることが重要。極端に言えば、SE出身者が全員取る。そうすれば、50代以上でもリストラされることはない。藪内氏はそんなキャリアパスの理想を持っている。

さらに社内ITコーディネータの活用方法については「ITコーディネータだけではシステムの完全ONは不可能。ITコーディネータとSE・PMが合体することによって、初めて明るい展望が開ける」と語る。

ITコーディネータの役割は “信頼のおける通訳”

現在、コンピューターシステムハウスには我妻くるみ氏というITコーディネータがいる。全国的にもまだまだ少ない女性のITコーディネータだ。

ITコーディネータになったことによって、我妻氏の仕事の中身が大きく変わったという。

SEだとシステムの狭い範囲でしか物事を見てない。担当者とは細かいことの打ち合わせばかり。しかも、打ち合わせが終わるとすぐに会社へ帰ってきた。

「SEだと、このシステムを導入すれば良くなるということは説明でき

る。しかし、経営的な観点がないため、その次はどうすればいいのかが分からない。それが、ITコーディネータになってからは視界が広がった。次のステップを話せるようになったのです」(我妻氏)

ユーザーとの打ち合わせでも、競合のシステムの話聞いて、それを評価するようにした。それはいい、それはダメだとはっきりと言う。きちんと説明をすると、ユーザーも納得する。そして、そのように接することによりユーザーとの距離も近くなる。ユーザーは知識を持っていないので、分かりやすく解説することが何よりも重要だという。ITコーディネータは“信頼のおける通訳”になることが大きな役割だと我妻氏は感じているという。

社内ITコーディネータだと バランスを取る難しさも

しかし、我妻氏は社内ITコーディネータについて、ジレンマを感じることもあるという。

「ベンダーにいますので、中立的な立場というのが難しいときもある。自社の営業もしなくてはいけない。そのバランスを取るのが難しい」。

特にITCふくしまの仕事で、地元企業のコンサルティングをするときが一番難しい。マッチングセミナーなどの場で自分の会社のことを推したいのだが、それを言っているのかがどうかを悩むことがあるという。

女性の年齢の話をするのは失礼だが、我妻氏はすでに40代。この年代でITコーディネータを資格を取得することについて、どのような考えを持っているのだろうか。

「この業界は35歳定年説というのがあります。確かに新しい技術の知識の吸収は歳をとってくると難しくなりますが、業務知識や事例の知識は歳を重ねていくにつれて豊富になる。いろいろな引き出しができるので、提案も複数のパターンで行える。また、それらを組み合わせる方法も

提案できる」(我妻氏)。

ベテランSEがITコーディネータになることについて藪内社長は、「いろいろな人に資格を取ってほしいが、ITコーディネータはベンダーから出るのが自然の流れ。システムのことからコンサルまでできるのは、ベンダー出身でないと難しい。SEの経験も5年くらいでは無理。10年以上やって初めて全方位の仕事ができる。素人がすぐになれるものではない」と藪内氏は語る。

さらに「企業の経営者は60、70代も多い。どんな立派なことを言っても20、30代では小僧扱いされ、相手の心に響かない。ある程度歳がいつていると、打ち解けやすい。例えば、打ち合わせのあとに飲みに行くこともある。そうすると距離がさらに縮まり、懐へ入りやすい」と言う。

IT業界では若い力が重要だとよくいうが、歳を取ると明るい世界がある。それをITコーディネータで証明したいというのが藪内氏の持論だ。

ITコーディネータと 情産協の橋渡しをしたい

福島ITコーディネータは、問題も抱えている。ITCふくしまにはベンダーの社員がほとんどいないため、相談に乗ることはできても導入から先が難しいケースが多いという。

しかし、独立系のITコーディネータはセミナーの開催は得意だ。ITCふくしまがユーザーを集める場を作って、その後の受け皿として福島県情報産業協会がある。このようなベンダーへの流れが理想的だと我妻氏は考えている。

「企業がやりたいことと、できることが違うので理想論だけだと動かない。ITコーディネータだけではアウトプットがうまくできない。しかしベンダーは行くとすぐに動く。現状より一歩二歩進むのが何よりも重要なのです」(我妻氏)

ITCふくしまの中でも、福島県情報産業協会に働きかけようとする動

きがある。ITコーディネータだけでは、なかなか実績が作れないということが大きな要因だ。

「情産協の会員の中にはITコーディネータのことを信じていない人も多い。僕は福島的情産協の理事でもあるので、まずはセミナーやその後の飲み会を開催し、両者の交流から始めることを考えています」

現在の福島県のITコーディネータについて藪内氏は、「ITコーディネータの役割が高いのに評価が低いのは、きちんとしたアウトプットをユーザーに出していないからです。インプット(補助金投入)→アウトプット(企業の具体的改善・改革)の方程式を、各ITコーディネータにはきちんと意識して実施してもらいたい。一部、インプット(補助金)を目当てにしたようなITコーディネータがいるのも事実で、そのような人がITコーディネータの評価を下けている」と手厳しい。

ITコーディネータが担当した成功事例を、1件でも多く作ることが今後は重要だという。それがあれば情産協の会員も、ITコーディネータの役割を評価してくれるはずだ。

ベンダーとITコーディネータが協力してこそ、地元の中小企業を盛り上げていくことができると藪内氏は考えている。



〈会社概要〉

株式会社コンピューターシステムハウス
福島県郡山市喜久田町卸三丁目37-2
<http://www.csh-web.co.jp/>

事業内容：ソフトウェア開発、パソコン関連機器販売、インターネットビジネスの構築、LAN・WANの構築・サポート